

# 新規に看護学実習を受け入れる 実習指導者の情報ニーズと大学への期待

Hospital Nurses' Hope and Information Needs When They  
Receive Baccalaureate Program Students for the First Time

箕輪 千佳

Chika Minowa

キーワード：実習指導者 看護学実習 情報ニーズ 大学への期待

Key words：hospital nurse, nursing clinical practicum, information needs,  
hope for university

## 要旨

本研究の目的は、初めて大学の看護学実習を受け入れる施設の実習指導者の実習指導上の情報ニーズと大学へどのようなことを期待しているかを調査・分析し、実習場との連携のための資料とすることである。地方病院の2施設78名を対象とし、質問紙調査を行い以下のような結果を得た。

実習指導者は、学生の背景やカリキュラム、実習要項、教員との役割分担などの指導内容把握のための情報ニーズを多く持っていた。大学には質の高い卒業生の育成と、実習時の学生の倫理や態度の育成を期待していた。看護学実習の受け入れ経験がない病院では、各ユニットで主導的立場が取れる30～40歳代が実習指導者になっており、若者への接し方と自分たちが学んだ頃とは変化した現在の看護学教育についての情報ニーズを持っていた。大学には、地元への卒業生の就職と学生が実習に来ることにより、自己・病院職員へもたらされる良い影響を期待していた。看護専門学校の実習施設であり、さらに大学を受け入れる実習指導者は、専門学校と大学を比較した、学生と教育の特徴についての情報ニーズを持っていた。また、30歳代以下の若年者が多く、負担感を少なくするなどの、指導環境への配慮と継続教育提供の場を期待していた。このように病院毎の実習指導者の特徴により情報ニーズと大学へ期待することに違いがあり、それを踏まえた連携が必要である。

## I. はじめに

2000年以降、わが国において看護系大学が急激に増え、2008年では160大学を超え、なお増加が続く見込みである。それに伴い、今まで全く看護学実習を受け入れた経験のない施設や初めて大学の看護学実習を受け入れる施設が増加している。

保健師看護師助産師学校養成所指定規則では看護学実習の単位は全97単位の内23単位を占め、約1/4もの単位が当てられている。また、看護学実習は「看護学の講義、演習により得た科学的知識、技術を実際の患者・クライアントに対し実践し、既習の理論、知識、技術を統合、深化、検証させる」(杉森ら, 2006)のものであり、「看護学教育の最大の特徴」である。

看護学実習での教育には大学教員の指導力はもちろんのこと、実習指導者の影響は大きく数多くの研究も報告されている(奥坂ら, 2003; 細田ら, 2004; 湯浅ら, 2001)。

看護学実習で大きな影響力のある実習指導者だが、大学教育を経験していない人が多く、新規に大学の看護学実習を受け入れるにあたって、指導上どのような情報を得たいと考えているか、どのようなことを大学に期待しているかに関する報告は少ない。

今回、大学の看護学実習受け入れ経験のない2病院で臨地実習を開始するにあたって、実習指導者の情報ニーズと大学への期待を調査、分析し、若干の示唆を得たので報告する。

## II. 研究目的

新規に大学の看護学実習を受け入れる病院の実習指導者の持っている情報ニーズと大学に対する期待について調査・分析し、実習場との連携のための資料とする。

## III. 用語の操作的定義

実習指導者：看護学実習において学生の指導

を係または委員として担当する臨床の看護職をいう。

情報ニーズ：看護学実習を受け入れるにあたり、実習指導者が学生の指導上知っておく必要があると考えている情報をいう。

大学への期待：実習生の在籍する看護系大学に対して実習病院の実習指導者が望んでいることをいう。

## IV. 研究方法

### 1. 対象

調査施設は以下の2施設を選定した。

A病院：地方の中規模病院で看護学実習の受け入れ経験がない実習指導者23名。

B病院：地方の大規模病院で50年来、附属の3年課程及び2年課程の看護専門学校の実習を受け入れており、さらに大学生の実習が加わることとなった実習指導者55名。

### 2. 調査期間

平成19年11月～12月

両病院は新規に大学の看護学実習を受け入れることは上司より説明があったが大学側とは全く検討会がなされていない時期である。

### 3. 方法

調査対象者である実習指導者には文書で本調査の趣旨を説明、自記式質問用紙を実習指導者会議で実習指導者のリーダーに配布してもらい、本人からの郵送法で回収した。

### 4. 調査内容

職業的背景と実習指導に関する基本属性として、性別、年齢、職位、専門学歴、臨床経験年数、実習指導者経験年数、実習指導者講習会の受講状況を調べた。

「実習を受け入れるにあたり知りたいこと」「大学に期待すること」を質問項目とし、自由に記述してもらった。

### 5. 倫理的配慮

調査依頼書に調査の目的、匿名性の保持を記載し任意の参加を保障した。回答の郵送を

持って研究参加への同意とした。

## 5. 分析方法

結果の分析は、実習指導経験5年以上の教員2名が自由記述を何度も読み、意味ある単位に分けさらに期間をおいて再度分析した。

Berelsonの内容分析の手法を用いた。

1) 文脈単位は自由回答式質問に対する実習指導者1人分の回答の記述全体とした。

2) 記録単位は自由回答式質問に対する回答に記述され、意味内容が一つとなるように、かつ文脈を損ねないように文脈単位を分割し、主語と述語からなる一文に表現した。

3) 対象個々の記録単位は、内容の類似性に従って分類し、抽象化の作業を行いサブカテゴリー化し、さらに抽象度を上げてカテゴリー化した。

4) 実習指導者の所属病院別に、サブカテゴリーの記録単位の出現数を出し、施設の特徴を見るために $\chi^2$ 検定を行った。解析にはSPSS16.0J for Windowsを使用した。

## V. 結果

配布した78部のうち、回収された質問紙は40部（回収率51.3%）、有効回答は39部であった。

### 1. 対象の背景

対象の背景は、表1のとおりであった。

年齢は、30歳代13名（33.3%）、40歳代16名（41.0%）が多く、20歳代は7名（17.9%）50歳代が3名（7.7%）であった。A病院はほとんどが40歳代で13名（81.3%）、30歳代が3名（18.6%）で、20歳代と50歳以上はいなかった。B病院は30歳代が10名（43.5%）と最も多く、次いで20歳代が7名（30.4%）、40歳代と50歳以上は3名（13.0%）と、どの年代もいた。

職位はA病院が主任と実習指導者が7名ずつ（43.8%）、スタッフ2名（12.5%）、師長はいなかった。B病院は実習指導者21名（91.3%）、師長と主任はそれぞれ1名（4.3%）、スタッフはい

なかった。

臨床経験は6年～10年が11名（28.2%）、11～20年が14名（35.9%）、21年以上が13名であった。A病院は、10年以下はおらず11～20年が7名（43.8%）、21年以上が9名（56.3%）、B病院は6～10年が最も多く11名（47.8%）、11～20年が7名（30.4%）、21年以上が4名（17.4%）、0～5年が1名であった。臨床実習指導者経験年数は、0～5年、34名（87.2%）が多かった。

専門学歴は看護専門学校3年課程が20名（51.3%）とほぼ半数、同じく2年課程が11名（28.2%）、短期大学が7名（17.9%）、大学1名（2.6%）で、この比率はA・B両病院ともほぼ同じであった。

実習指導者講習会を受講したのは全体で15名（38.5%）、A病院は4名（25.0%）、B病院は11名（47.8%）であった。

表1 対象の背景

		全体		A病院		B病院	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
有効回答者		39	100.0	16	69.6	23	41.8
性別	男性	1	2.6	0	0	1	4.3
	女性	38	97.4	16	100	22	95.7
年齢	20歳代	7	17.9	0	0	7	30.4
	30歳代	13	33.3	3	18.6	10	43.5
	40歳代	16	41.0	13	81.3	3	13.0
	50歳～	3	7.7	0	0	3	13.0
職位	看護師	2	5.1	2	12.5	0	0
	指導者	28	71.8	7	43.8	21	91.3
	主任	8	20.5	7	43.8	1	4.3
	師長	1	2.6	0	0	1	4.3
臨床体験	0～5年	1	2.6	0	0	1	4.3
	6～10年	11	28.2	0	0	11	47.8
	11年～20年	14	35.9	7	43.8	7	30.4
	21年以上	13	33.3	9	56.3	4	17.4
指導者経験年数	0～5年	34	87.2	14	87.5	20	87.0
	6～10年	2	5.1	1	6.2	1	4.3
	11年～20年	2	5.1	0	0	2	8.7
	21年以上	1	2.6	1	6.2	0	0
専門学歴	看護専門学校2年課程	11	28.2	5	31.3	6	26.1
	看護専門学校3年課程	20	51.3	8	50.0	12	52.2
	短期大学	7	17.9	3	18.8	4	17.4
	大学	1	2.6	0	0	1	4.3
指導者講習会	受講あり	15	38.5	4	25.0	11	47.8
	受講なし	24	61.5	12	75.0	12	52.2

## 2. 情報ニーズと大学への期待

両方の質問項目の回答に、大学生の実習を受け入れる実習指導者の気持ちが表現された記述があり、2つの質問項目への回答を1つにまとめて分析した。

内容分析の結果、情報ニーズと大学への期待は、4つのカテゴリーおよび16のサブカテゴリー、114の記録単位としてまとめられた(表2)。以下、カテゴリー(【 】で示す)、サブカテゴリー(< >で示す)、記述内容の一部(「」で示す)を用いて結果を説明する。( )の数値は病院別の欄は各病院の記録単位数の合計からみた割合、その他は記録単位数全体からみた割合である。

最も記録単位数が多かったカテゴリーは【指導内容把握のための情報ニーズ】で、67記録単位(58.8%)、7サブカテゴリーから形成された。最も多いサブカテゴリーは<具体的実習要項についての情報ニーズ>で27記録単位(23.7%)、具体的記述は「実習目標、評価について」「看護技術は具体的に何ができるか、どこまでできるか」「看護記録、パソコン操作の学習内容」「電子カルテをめぐる取り扱い」などであった。また、B病院からは「現在来ている看護専門学校との重なり」についてが挙げられた。次に多かったサブカテゴリーは<カリキュラム全体についての情報ニーズ>17記録単位(14.9%)で具体的記述内容は「学内での演習内容の実際」「大学の理念、方針、授業進捗」「大学が期待する卒業生像」であった。

次に多いのは、<教員と実習指導者の役割分担についての情報ニーズ>12記録単位(10.5%)であり、具体的内容としては「教員はどこまで実習中サポートしてくれるか」「受け持ち患者の同意のとり方や書類についての関わり方」などで、B病院がA病院の2倍の記録単位数があったが、有意差はなかった。その他、A病院からは<大学から病院への要望><大学から実習指導者への要望>がそれぞれ2記録単位ずつ挙げられた。また、A病院

から、「現在どのような看護教育が行われているか解らない」「昔とカリキュラムが違うのでなにをしたら良いか解らない」「年配の看護師が多く、看護診断や看護論は苦手である」などのように<現在の看護教育についての情報ニーズ>が4記録単位(7.5%)挙げられた。一方、「大学と専門学校で実習内容が違うのか」というようなく大学教育の特徴についての情報ニーズ>が2記録単位(3.3%) B病院からのみ挙げられた。

次に記録単位数が多かったカテゴリーは【大学の役割への期待】であり、24記録単位(21.1%)、4サブカテゴリーから形成された。中でも多いのが<質の高い卒業生の育成の期待>11記録単位(9.6%)で「あきらめないでやり通す人材の育成」「すばらしい人材の育成」という記述内容である。その他、A病院からは<自己、病院職員へ良い影響がもたらされる期待>5記録単位(9.4%)が挙げられた。具体的記述内容は「学生が入ると病院の雰囲気やスタッフの心構えも変わるので期待している」「臨床実習指導者も多くのことを学びたい」「受け入れ側も勉強することで活気づく、よい刺激となる」であった。同じくA病院から多かったのが<地元への卒業生の就職の期待>であった。B病院からのみ挙げたサブカテゴリーは<継続教育提供の場としての期待>2記録単位(3.3%)で、具体的には「保健師・助産師課程を作ってほしい」「働きながら資格が得られる場や研修の提供」というものであった。

【学生についての情報ニーズ】は11記録単位(9.6%)、3つのカテゴリーから形成されている。「学生の出身」「看護に対する思い」「大学の志望理由」「ボランティアの経験」などからなる<学生の背景についての情報ニーズ>4記録単位(3.5%)、B病院に多い「専門学校の学生との違い」「大学生の目指すもの」からなる<大学生の特徴についての情報ニーズ>6記録単位(5.3%)、数は少ないがA病院



から挙げられた＜若者との接し方についての情報ニーズ＞1 記録単位（1.9%）であった。

【実習時の大学への期待】は12記録単位（10.5%）、2つのサブカテゴリーから形成されている。＜学生の倫理や態度の育成＞5記録単位

位（4.4%）の具体的記述内容は「接遇や人間性を成長させる学習をしてきてほしい」「身だしなみをきちんとしてほしい」「倫理的行動ができるようにしてきてほしい」であった。

表2 実習開始時の実習指導者の情報ニーズと大学への期待の分類と記述内容

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容(一部抜粋)	記録単位数(%)			カテゴリー別記録単位数合計(%)	χ <sup>2</sup> 検定
			A病院	B病院	合計		
学生についての情報ニーズ	学生の背景についての情報ニーズ	・学生の出身 ・看護に対する思い ・大学の志望理由 ・ボランティアの経験	2(3.8)	2(3.3)	4(3.5)	11 (9.6)	n.s.
	大学生の特徴についての情報ニーズ	・専門学校の学生との違い ・大学生の目指すもの	0 (0)	6(9.8)	6(5.3)		*
	若者との接し方についての情報ニーズ	・若者との接し方がわからない	1(1.9)	0 (0)	1(0.9)		n.s.
指導内容把握のための情報ニーズ	カリキュラム全体についての情報ニーズ	・学内での演習内容の実際（血圧測定、リネン交換、採血、沐浴など） ・大学の理念、方針、授業進度 ・大学が期待する卒業像、どんな学生を育てたいか	9(17.0)	8(13.1)	17(14.9)	67 (58.8)	n.s.
	具体的実習要項についての情報ニーズ	・実習目標、評価について ・看護技術は具体的に何ができるか、どこまでできるか ・看護記録、パソコン操作の学習内容 ・それぞれの領域実習の指導で、大学が大事にしている点 ・電子カルテをめぐる取り扱い ・現在来ている看護専門学校との重なり	11(20.8)	16(26.2)	27(23.7)		n.s.
	大学教育の特徴についての情報ニーズ	・大学と専門学校で実習内容が違うのか	0 (0)	2(3.3)	2(1.8)		n.s.
	教員と指導者の役割分担についての情報ニーズ	・教員は実習中どこまでサポートしてくれるか ・受け持ち患者の同意のとり方や書類についての関わり方 ・実習が入ると看護業務がどうなるか解らない	4(7.5)	8(13.1)	12(10.5)		n.s.
	大学から病院への要望	・ハード面でこれだけは確保してほしいと思うこと ・病院への要望	2(3.8)	0 (0)	2(1.8)		n.s.
	大学から実習指導者への要望	・指導者に望むこと	2(3.8)	0 (0)	2(1.8)		n.s.
	現在の看護学教育についての情報ニーズ	・自分が学生のとき受けた指導のみなので現在どのような看護教育が行われているか知らない ・昔とカリキュラムが違うので何をしたら良いか解らない ・年配の看護師が多く、看護診断や看護論は苦手である	4(7.5)	1(1.6)	5(4.4)		n.s.
大学の役割への期待	継続教育提供の場としての期待	・保健師、助産師課程を作してほしい ・働きながら資格が得られるような場や研修の提供	0 (0)	2(3.3)	2(1.8)	24 (21.1)	n.s.
	質の高い卒業生の育成の期待	・あきらめないでやり通す人材の育成 ・すばらしい人材の育成	6(11.3)	5(8.2)	11(9.6)		n.s.
	地元への卒業生の就職の期待	・卒業生が多くこの病院に就職してほしい ・地域に建つ大学の学生であるという意識で1人でも多くこの地域に残してほしい	5(9.4)	1(1.6)	6(5.3)		*
	自己、病院職員へ良い影響がもたらされる期待	・学生が入ると病院の雰囲気やスタッフの心構えも変わる ・ので期待している ・臨床指導者も一緒に多くのことを学びたい ・受け入れ側も勉強することで活気づく、良い刺激になる	5(9.4)	0 (0)	5(4.4)		*
実大習学時の期待	学生の倫理や態度の育成	・接遇や人間性を成長させる学習をしてきてほしい ・身だしなみをきちんとしてほしい ・倫理的行動が取れるようにしてほしい	2(3.8)	3(4.9)	5(4.4)	12 (10.5)	n.s.
	実習生増加による指導環境への配慮	・負担が大きいため指導内容を専門学校と統一してほしい ・専門学校だけで精一杯で、これ以上実習日が増えれば、こちらが持たない。それを考えて実習日程を組んでほしい	0 (0)	7(11.5)	7(6.1)		*
合 計			53	61	114		

もう一つのサブカテゴリーはB病院からのみ挙げられた＜実習生増加による指導環境への配慮＞であった。「負担が大きいので、指導内容を専門学校と同じにしてほしい」「専門学校だけで精一杯で、これ以上実習日が増えてはこちらが持たない。それを考えて実習日程を組んでほしい」であった。

A,B病院の施設間で記録単位の出現数の有意差を見るとA病院が有意に多いサブカテゴリー

は＜地元への卒業生の就職の期待＞と＜自己、病院職員へ良い影響がもたらされる期待＞であった。B病院が有意に多かったのは＜大学生の特徴についての情報ニーズ＞と＜実習生増加による指導環境への配慮＞であった。

記録単位数が多いサブカテゴリーについて実習指導者の背景別に区分すると表3のようになった。

表3 実習指導者の背景とサブカテゴリーの記録単位数（抜粋）

	病 院	指導者経験年数		年 齢				臨床経験年数			専 門 学 歴			指導者講習会受講	
		0～5年	6年以上	20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上	10年以下	11～20年	21年以上	2年課程	3年課程	短大以上	あり	なし
n	A	14	2	0	3	13	0	0	7	9	5	8	3	4	11
	B	20	3	7	10	3	3	12	7	4	6	12	5	10	13
大学生の特徴についての情報ニーズ	B	5	1	2	2	1	1	3	1	2	1	4	1	2	4
カリキュラム全体についての情報ニーズ	A	7	2	0	1	8	0	0	2	7	3	5	1	2	7
	B	8	0	2	4	2	0	1	4	3	3	4	1	4	4
具体的実習要項についての情報ニーズ	A	10	1	0	3	8	0	0	5	6	2	8	1	4	7
	B	14	2	7	6	2	1	11	3	2	3	10	3	5	11
教員と指導者の役割分担についての情報ニーズ	A	4	0	0	2	2	0	0	2	2	1	1	2	3	1
	B	7	1	4	2	2	0	6	1	1	2	3	3	2	6
質の高い卒業生の育成の期待	A	6	0	0	1	5	0	0	3	3	1	3	2	1	5
	B	3	2	0	3	0	2	0	3	2	1	3	1	2	3
地元への卒業生の就職の期待	A	4	1	0	1	4	0	0	1	4	2	3	0	1	4
自己、病院職員へ良い影響がもたらされる期待	A	4	1	0	0	5	0	0	1	4	1	3	1	1	4
実習生増加による指導環境への配慮	B	7	0	4	3	0	0	5	2	0	2	5	0	3	4

指導者経験年数は6年以上の対象者が少ない為一つにまとめ6年以上、臨床経験年数0～5年は1人のため6～10年と一緒にまとめて10年以下、専門学歴は大学卒が1人のため短期大学以上とし、それぞれ個人が特定されないように配慮した。

A病院の指導者のみにあった＜地元への卒業生の就職の期待＞と＜自己、病院職員への良い影響がもたらされる期待＞は40歳代、臨床経験年数21年以上に多かった。

B病院の実習指導者のみにあった＜大学生の特徴についての情報ニーズ＞は背景別の特徴は見あたらなかった。＜実習生増加による指

導環境への配慮>は指導者経験年数0～5年以下と30歳代以下に多かった。

A B両病院に共通したものでは、<質の高い卒業生の育成の期待>は臨床経験年数10年以下では記録単位の出現はなかった。また、<教員と指導者の役割分担についての情報ニーズ>は、A病院では指導者講習会受講者に多いが、B病院では臨床経験10年以下、指導者講習会を受講していない人に多かった。

## VI. 考察

今回の調査によって、新規に大学の看護学実習を受け入れる病院の実習指導者がどのような情報ニーズと大学への期待を持っているか明らかとなり、施設別に特徴があることがわかった。

実習指導者は、カリキュラム、実習要項、教員との役割分担など、指導内容把握のための情報と、学生の背景や大学生の特徴など、学生についての情報を必要としていることが明らかとなった。大学には、役割として、継続教育提供の場の提供と質の高い卒業生の育成を期待していた。実習までに学生の倫理や態度を育成することを期待していることが解った。

以下に施設別の特徴を考察する。

A病院は看護部でどのように看護学実習に関わるかを話し合い、実習指導者のみが行うのではなく、スタッフも加わり看護部全体で関わっていくと決めたため、各ユニットの看護師全体に主導的立場が取れる主任とそれに次ぐ看護師が実習指導者になり指導体制を整えることになった。そのため、全員、臨床経験11年以上、年齢30～40歳代となった。これは、指導者をサポートするシステムができるまでは、臨床経験年数の高い看護師が指導者となる必要があるとの理由で、初めて看護学実習に関わる施設で、しばしば取り入れられている（袖山，2005）。看護学実習の指導が

未経験で、実習指導者の年齢が30～40歳のため、若者とあまり接した経験がなく、「どのように接したらよいかわからない」ととまどい、<若者との接し方についての情報ニーズ>を挙げている。そして、自分が受けた教育と現在の大学化された看護学教育が違うのではないかと思い、自分たちが学生の時はなかった科目や看護技術の変化などにより戸惑いを持ち、現在の看護学教育についての知りたいと思っている。また、実習指導としてどのような物品や施設が必要なのか、ハードとソフトの両面で「大学から病院・指導者への要望」を聞き準備を整えようとしている。しかし、実習を単に負担が増えるといったネガティブな気持ちでなく「学生に刺激を受けて自分たちも成長しよう、スタッフにも良い刺激となる」といった<自己、病院職員へ良い影響がもたらされる期待>を持っている。

<教員と指導者の役割分担についての情報ニーズ>は、A病院はB病院の半分の記録単位数となっており、指導者講習会の受講の有無で差が生じている。B病院では指導者講習会を受講しなくとも、すでに指導者業務を経験しているため、具体的な実習指導者の役割が解っており、教員とどのような分担になるかが大きな情報ニーズになったと考えられる。一方、A病院では「実習が入ると看護業務がどのようになるかわからない」と具体的記述があるように、指導者講習会を受講しないと役割分担や責務など具体的なことがわからなかった結果ではないかと考えられる。

B病院は50年来附属の看護専門学校の実習を行ってきた実績があり、若者や学生への接し方についての不安の記述はない。<大学生についての情報ニーズ><大学教育についての情報ニーズ>では特に看護専門学校と大学の違いについての情報を必要としている。今まで看護専門学校の学生で実施してきた実習指導のどこを変えなくてはいけないのか、どこが同じでよいのか理解したいということ

はないかと考える。

また、「看護専門学校の実習のみで精一杯」という内容の＜実習生増加による指導環境への配慮＞が挙げられた。実習指導者の背景別で有意差はなかったが、全員指導者経験年数0～5年、の30歳代以下であった。伊藤ら（2005）は、32歳以下を若年者とした実習指導者より、非若年者のほうが「臨地実習指導者役割の必要性の認識度と実行度」で有意に高く、非若年者のほうが余裕があった、と報告している。いわば、32歳以下の実習指導者は余裕がなかったということで、今回の調査の結果とも一致している。従って、この年代の指導者にいかに説明し、負担感の少ない実習計画とするかが重要である。

【大学の役割への期待】として＜継続教育提供の場としての期待＞を挙げているが、これもキャリアアップを目指し学習意欲の高い若年者がB病院の実習指導者に多いからと考えられる。

以上のように両病院に共通に多い情報ニーズと大学への期待もあるが、実習指導者の背景による特徴から生じていると思われるものもあり、それらを踏まえた連携が必要であると考ええる。

今回の研究は回答数が39と少ないこと、自由回答式質問の記述内容であることにより一般化するまでには至らない。また、大学側と臨床側がどのくらい検討会を開いているかの時期によって情報ニーズが変化してくると思われる。今後はこの結果を実習場との連携に資料として活用していきたい。

## VII. まとめ

1. 新規に看護大学の臨地実習を受け入れる施設の実習指導者の最も多い情報ニーズは＜学生の背景について＞と＜カリキュラム、実習要項、教員との役割分担＞などの指導内容把握のための情報であった。

2. 大学には役割として＜質の高い卒業生の育成＞を、実習時には＜学生の倫理や態度の育成＞を期待していた。

3. 看護学実習の受け入れ経験がない病院では、指導体制を整えるために30～40歳代が実習指導者になっており、＜若者への接し方＞と自分たちが学んだ頃とは変化した＜現在の看護学教育＞についての情報ニーズを持っている。

大学には＜地元への卒業生の就職＞と学生が実習に来ることにより＜自己、病院職員へもたらされる良い影響＞を期待している。

4. 看護専門学校の実習施設であり、さらに看護大学の実習を受け入れる施設の実習指導者は、＜大学生と大学教育の特徴＞を専門学校と比較した情報ニーズを持っている。また、30歳代以下の若年者が多く、負担感を少なくするなどの＜指導環境への配慮＞と＜継続教育提供の場＞を求めている。

二病院の実習指導者の背景の特徴により、情報ニーズと大学への期待に違いが見られ、それらを踏まえた連携が必要である。

## 謝辞

調査にご協力いただきました実習指導者の皆様に深く感謝申し上げます。

尚、本論文の一部は日本看護教育学会第18回学術集会にて報告いたしました。

## 文献

- 伊藤良子・山田豊子・安斎三枝子・他（2005）. 臨地実習指導における看護師役割意識調査について（第2報）－若年者群と非若年者群間の「役割意識」と「実行度」の比較－, 京都市立看護短期大学紀要, 30, 111－120.
- 奥坂喜美子・工藤快枝（2003）. 臨床実習指導者に関する研究の現状と課題. 第34回日本看護学会論文集（看護教育）, 143－156.



- 杉森みど里・舟島なをみ(2006)．看護教育学，第4版.医学書院.
- 袖山悦子・福澤恭子・坂井小百合 他(2007)．  
臨地実習指導体制づくり－アンケート調査  
を中心に－.看護実践の科学, 32 (12) , 76－  
80.
- 細田泰子・山口明子(2004)・実習実習指導者  
の教育的アプローチの特徴とその関連要  
因.日本看護学教育学会誌, 14 (2) , 1－16.
- 湯浅美千代(2001) .教員と臨地実習指導者  
との連携－病院実習に焦点を当てて,  
Quality Nursing, 7 (3) , 31－36.